

河 (1951)

THE RIVER

メディア 映画

ジャンル ドラマ

製作国 アメリカ

色彩 Color

時間 105分

初公開日 1952/06/24

公開情報 UA = 松竹洋画部

【解説】

印象派画家の第一人者、父オーギュストの絵画に匹敵する色彩に溢れた、J・ルノワールのインド随想。三人の少女の恋の芽生えが一応の筋立てとしてあるが、それは表層で、主人公は題名の河―聖なるガンジスとそこを中心に営まれる人々の生活であり、そこに育まれた彼らの哲学と神話。

英国人の製麻工場支配人の子沢山一家の長女ハリエットは14歳。18歳になる工場主の娘ヴァレリーと、隣家の米国人の退職者ジョン氏の現地女性との混血娘メラニーとは大の仲良しだった。ジョン氏の甥でやはりジョンという名の若い退役軍人（従って当初は大尉と呼ばれている）がこの地を訪れてから、三人はそれぞれ初めての恋に胸ときめかせる。ハリエットは詩を愛する少女で人知れず日記にその想いを書きつけるだけだが、ヴァレリーは大胆に彼に接近する。メラニーはもっと深いところでこの感情を受け止め、インド人と白人社会の相克に悩む。合間に四季折々のベンガルの祭りが挿入され、少女たちの煌めきと妙なる唱和を成す。大戦の英雄、青年ジョンは実は戦闘で片足を失い義足の身。周囲の哀れみを逃れて、ここまで流れてきたのだが、ヴァレリーと遊ぶうち転んで、助け起こそうとする彼女にかんしゃくを起こし、再び塞ぎ込んでしまう。彼を気遣う娘たち。一方で、ハリエットの弟ボビーは蛇使いに夢中。菩提樹の根元にコブラを見つけ、結局はその毒牙にかかって死んでしまう。ショックでその晩床を抜け出したハリエットは河を舟で彷徨うが、漁師に連れ戻される。ジョンは少年の葬儀でやっと目覚めて、祖国へ帰った。そして春を迎え、ハリエットにもう一人妹ができたとき、ジョンから結婚を伝える便りが届き、三人の少女は感慨深げに河に眺め入るのだった。

ゴッデン女史の半自伝的小説に圧倒されたルノワールが彼女の脚本協力を得て取り上げた心洗われる、癒しの文明論。ハリエットが語って聞かせる、“クリシュナとラーダ”になる村の恋人たちの逸話の幻想美は圧巻だ。

【クレジット】

監督	ジャン・ルノワール	Jean Renoir	
製作	ケネス・マッケルダウニー	Kenneth McEldowney	
原作	ルーマー・ゴッデン	Rumer Godden	
脚本	ルーマー・ゴッデン	Rumer Godden	
	ジャン・ルノワール	Jean Renoir	
撮影	クロード・ルノワール	Claude Renoir	
編集	ジョージ・ゲイル	George Gale	
音楽	M・A・パーサ・サラティ	M.A. Partha Sarathy	
助監督	サタジット・レイ	Satyajit Ray	(クレジットなし)
出演	ノーラ・スウィンバーン	Nora Swinburne	母
	エスモンド・ナイト	Esmond Knight	父
	アーサー・シールズ	Arthur Shields	ジョン氏
	サプロヴァ・マケルジー	Suprova Mukerjee	ナン

トーマス・E・ブリーン	Thomas Breen	ジョン大尉
パトリシア・ウォルターズ	Patricia Walters	ハリエット
ラーダ	Radha	メラニー
エイドリアン・コリ	Adrienne Corri	ヴァレリー